

# 擬音語・擬態語の研究

関 祇 英

## 0.1 はじめに

(a) ドアをガチャンと閉める。

(b) 扉をコンコン叩く。

におけるガチャン・コンコンのような音響の描写を行なう語を擬音語と称する。  
また、

(c) シーツに糊をつけすぎてゴワゴワしている。

(d) 荷物がズッシリと重い。

におけるゴワゴワ・ズッシリのような音響には無関係な事象の状態などを表す語を擬態語と称する。

以上、言語記号の中には、擬音語・擬態語といった、一般の言語記号のように、抽象的な観念（意味）の指示だけに止まらず、音響なり事象なりの状態や程度を暗示的に伝達する側面を持つ語群が存在している。

一般に言語は、その語の意味内容とその語に与えられている音との間に何ら自然的・必然的なつながりがないことが、恣意性という術語によって、ソシュール言語学以来言語記号の特徴として述べられてきた。これは確かに言語の大部分については当てはまるが、言語の一部については当てはまらない。そこで、言語記号のこの恣意性という性質について反論があるとき、必ずと言っていいほど持ち出されるのが、擬音語・擬態語と呼ばれるたぐいなのである。

擬音語・擬態語はどの言語にもあり、特に日本語には種類も多く、音声・文法・造語の諸方面でさまざまなバラエティが窺えるものである。また、直感的な表現形式で、人に強い印象を与えることができ、さまざまな場合に広く使われている。日本人の言語生活において擬音語・擬態語は切り放せないものと言ってもいいだろう。

## 0.2 研究の目的

本研究は現代日本語をより深く理解するための一環として、現代日本語の語彙において特徴的な語彙項目とされる擬音語・擬態語について考察する。

擬音語・擬態語は、一般の語と比べ、ある語を重ねたり、ある音を特別に効果的に使ったり、また様式化、定型化された音の組合せであること、また、一つの語（擬音語・擬態語）が表す意味領域も広いものであることが窺える。

擬音語・擬態語についてはいろいろな角度から研究が行なわれている。しかし、これまでの研究は形態のパターンを分類した研究、文法的な役割などの研究に偏っているようである。

本研究では、今までの擬音語・擬態語の研究の流れを踏まえた後、擬音語・擬態語の個々の語に対する意味分析を行なって擬音語・擬態語の意味特徴を考察する<sup>(1)</sup>。

まず、日常生活の中で頻繁に表れうる「人間の行為に関する擬音語・擬態語」を取り上げる。その取り上げられた個々の語（擬音語・擬態語）は「人間の行為に関する」という一つのかたまりの中で相互に強くあるいは弱く緊張関係を保ちながら一定の位置を占めていると言えるであろう。これは個々の語（擬音語・擬態語）がそれなりの一定の意味空間を形成していることにもなると考える。

また、日本語の擬音語・擬態語には促音・撥音・リ音・反復・清濁音の対立による形態的なヴァリエーションが窺える。そして、これらの促音・撥音・リ音・反復・清濁音の対立が形態的なヴァリエーションばかりでなく、意味的対立にも深く関わっていることを明らかにする。

以上、考察した結果から言語の一部を占めている擬音語・擬態語の意味構造と語彙としての特徴が明らかになるにつれて、日本語の語彙全体における擬音語・擬態語の特有の地位と役割も明らかになると思われる。

## 1 擬音語・擬態語の概念

まず、擬音語・擬態語の一般的な定義をまとめてみる。

◇『国語学研究辞典』

- ・擬声語……擬音語とも。自然界で生ずる種々の音や声を模写した語の一群
- ・擬態語……自然界に生氣するさまざまな状態を言語音で模写した語の一群

◇『擬音語・擬態語辞典』（角川書店）

「擬音語・擬態語概説」（執筆：金田一春彦）による定義

- ・擬音語……外界の音を写した言葉  
     擬音語……無生物の音を表すもの。  
     擬声語……生物の声を表すもの。
- ・擬態語……音を立てないものを、音によって象徴的に表すもの。  
     擬態語……無生物の状態を表すもの。  
     擬容語……生物の状態（動作・容態）を表すもの。  
     擬情語……人間の心の状態を表すようなもの。

◇『擬声語の研究』（大坪併治1989）

- ・擬声語……音声の持つ特殊な情感を利用して、端的に事物の状態を描写する言葉。（「音声」とは、人間の発音器官によって作られ、言語に用いられる声のことで、「特殊な情感」とは、ある音声を聞いて、大小・明暗・軽重・粗密・硬軟などの印象を受けるのは、その音声自体が、そう感じさせるものを持っているということで、「端的」とは「直接的に」と言い換えるし「事物の状態」とは、視（みる）・聴（きく）・触（ふれる）・味（あじわう）・嗅（かぐ）など、いわゆる五官を通して知覚される一切のもの、さらには、生理的な内部感覚から、心理的な感情・情緒に関するものまで含んだもの。）  
     （擬音語・擬態語を一括して「擬声語」と呼んでいるようである）

以上、大きく音の描写に基づく擬音語（擬声語）と状態の描写に基づく擬態語に分類されている。しかし、これらの用語はふつうそれほど厳密に使い分けられていないようである。また、擬音語と擬態語との境界が曖昧であり、はっきりとしないため、総称的に「オノマトペ」<sup>(2)</sup>、「音象徴語」などと呼ばれることもある。

このように、「擬音語」か「擬態語」かという分け方には、外界からの入力<sup>(2)</sup>が聴覚によるか、それ以外の感覚によるかという点が根本だといえようが、実際は両者がそうははっきりと区別できない場合も少なくないようである。

例えば、「がたっ」には、

- 堅い物などがぶつかって出る音を表す語。「～と窓が外れる」
- 急激に下がるさま。「客足が～と減る」「人氣が～と落ちる」

浅野鶴子『擬音語・擬態語辞典』(1978)

のように、「擬音語」と「擬態語」の両面が認められる。この他、類例として、「ころころ」「どんどん」「ごつごつ」「ずるずる」「ぷつり」「ぱちぱち」など数多くの語(擬音語・擬態語)を挙げることができる。

上述したとおり擬音語・擬態語の境界が不分明なものが数多く存在していることが分かった。ところが、一方で境界がはっきりと分けられるもののあることを考えると一つにまとめて扱うのは無理があると思われる。

本研究では、このような点を承知しながら、一応、擬音語(擬音語と擬声語を一括して擬音語と称する)と擬態語(擬容語, 擬情語, 擬態語を一括して擬態語と称する)に分けて考察を進めていくことにする。

以上、擬音語・擬態語の概念について触れたが、この他、擬音語・擬態語の概念に含まれる事項に何が考えられるだろうか。まず、「模写する」とか「写す」とかのように定義されているが、「模写する、写す」のことばの意味を確認してみると、

- ・模写する……まねてうつすこと。
- ・写す……ある事物をまねて他に作りなす。『広辞苑』より

というようになっている。「～まねてうつす」とは声帯模写とかに誤解を招く余地があるが、注意しておきたいことは、擬音語とは「自然・人間から起る非分節音を分節音に換えて写す」、擬態語とは「視覚映像を聴覚映像＝分節音に換えて写す」即ち、分節音に換えて写すのが大事な作業であるといえるだろう。(分節音とは言語音とも言い換えるが、本研究では分節音という表現を取る。)分節音か言語音かの事項が入っていない概念の定義にはこのことばによる限定を補うべきであると思われる。

また、擬音語・擬態語が言語の範疇に入るためにはその語(擬音語・擬態語)を使用する社会で意味が通じ合わなければならない。そのためには、まず話し手と聞き手が使用する言語の音韻体系の中で語(擬音語・擬態語)が成立しなければならないのである。即ち、水が流れる音の擬音語や、人が歩く様子や状態を示す擬態語も、皆、その言語の音韻体系によって創られ、その言語社会で通用されなければならないのである。換言すれば、社会性を獲得しなければならない。従って、同じニワトリの鳴き声でも、日本語では「コケコッコー」、英語では「cock-

a-doodle-doo」, 韓国語では「コキオーコッコテー」というように, すべてその中に [k] 音は含まれているが, 表現されたニワトリの鳴き声は単なる現実界の音の模倣ではなく, 各言語それぞれの音声的パターンに従って成立している。言語化する際にその言語社会の言語のカテゴリー内で創られ, それぞれの特有の音声条件に従って表現されるのが窺えるだろう。ここから, 擬音語・擬態語も一般言語と同じように社会をもとにして成り立っていることを示すといえるだろう。

もう一つ, 重要な点として取り上げられる事項は, 擬音語・擬態語には辞典に載せてあるようなラング的なもの, 誰もが用い, 誰もが聞いてそれと分かるふつうのものと, 詩や一部の小説, マンガの擬音語・擬態語のように, 一回的, 個人的で芸術であり, 特別なもの（どちらかといえばパロール的なもの）の二種類がある。

擬音語・擬態語は音と意味との関係が合理的であるところから, 新しい音の組合せでも音による類推で意味が理解されるので新作ということも可能になる。詩などの文学作品に独自で迫真的な描写を意図して苦心の創作が試みられたり, 最近のマンガ・劇画・CMなどに奇抜で刺激なものが登場するものこのような性格によると考えられる。本研究では, 研究の対象として前者のラング的なもの（共通語）だけに限定することにする。新しい語根創造“root-creation”としての重要な役割を担っている擬音語・擬態語の特徴を考えると, 創られ, 定着しつつあるものを捉えてその特徴を探っていくのが言語の真の姿を見るのに望ましいことであると思われるが, 個人的な造語, 流行語に類するものは, 自然に淘汰されたうえで社会に定着し, 一般に使われはじめて, 正式に擬音語・擬態語と認められるものになるから, 本研究ではラング的なもの（共通語）だけ考えていきたい。

## 2 擬音語・擬態語の形態と意味との関係

日本語の擬音語・擬態語においてはその形態的なヴァリエーションを作り出すものとして促音・撥音・リ音・反復・清濁音の対立が見られるが, これらの促音・撥音・リ音・反復・清濁音の対立が形態的なヴァリエーションばかりでなく, 意味的対立にも深く関わっていることを検討することにする。

## 2.1 形態と意味との関係

### 2.2.1 促音〔ッ〕について

#### □ 泉 邦寿 (1976)

基本形あるいは基本形が展開された形に促音を加えることによって、急に止める切れのよさの音価を与えることができ、これは物音や動作などの瞬間性、すばやさ、一回性などを表す効果がある。また、この促音で終わる擬音語・擬態語には文中では必ず「と」が付く。また、撥音の直前、直後には登場しない。

#### □ 南部忠明 (1992)

促音が接尾辞的な役割を果たしていながらも、表れる位置に強い制限があることを指摘している。また、「促音は、瞬間性、瞬発性、軽快性を司り、動作の開始を中心に描写する、といえる」と述べ、「音」の場合は一瞬・高い、「物」の場合は小さい・軽い、「運動動作」の場合は一瞬・短い・早いというように分けて考えている。

ところが、語末に起る促音の特徴だけで、語中に起る促音については、何も説明されていないようである。

#### □ 田守育啓 (1993)

日本語の擬音語・擬態語に表れる促音には、語末に付加されるものと、語中に起るものの二種類があって、両者は区別されるべきであると指摘している。

まず、語末に付加される促音を一音節に付くものと二音節に付くものに分けて、「サッ」「ハッ」「パッ」のように、一音節に付く促音は「瞬時性」を表し、「グサッ」「バタッ」「ポキッ」のように、二音節に付く促音は「急な終わり方」を表す。また、語中に起る促音は、「バッサリ」「バサリ」「バツタリ」「バタリ」というように、促音を含まない形態と対応している場合が多いので、語中に挿入される促音を「強調」の挿入辞と言っている。

以上、今まで成されてきた「促音」に関する考察の結果をもって、本研究なりにまとめてみる。まず、「促音」の起る位置によって二つに分けて考えていきたい。田守 (1993) で、語末に付くものと、語中に起るものとの二つに分けて考察しているが、結果的に語中に起る「促音」に対して擬音語・擬態語の独特の特徴として認めていないようである。ところが、語中に起る「促音」が田守 (1993)

で指摘したとおり「強調」の特徴だけであるとはいいいにくいと思う。

田守が挙げた「バッサリ」は、「バサリ」のように「促音」が入っていないものに比べてみると「強調」を表すといえるが、他の「□ッ□□」（※□印はある音を表す仮名の代わりに使う）の形、例えば「ウッカリ」「ウッスラ」などの「促音」は「強調」を表しているとはいいいにくいであろう。「バッサリ」と「バサリ」、「バツタリ」と「バタリ」のように対応する語（擬音語・擬態語）が存在している場合は「促音」があるものがないものに比べて「強調」を表しているといえる。しかし、「□ッ□□」の形の中で対応する語（擬音語・擬態語）がない場合も数多く見られるので、語中に現われる「促音」を擬音語・擬態語の独特の特徴として認めたうえ、「強調」以外の特徴を設ける必要があると思う。では、「□ッ□□」の形の中で「強調」以外の特徴を表す〈例〉を挙げてみる。

〈例〉『擬音語・擬態語使い方辞典』より

「アッサリ」… [意味A] 色、味などの濃度が薄いようす。

[意味B] 形態、様式が複雑でなく、簡素であるようす。

[意味C] 態度、性格がしつこくなく、思い切りのよいようす。

[意味D] 事態が簡単に変化するようす。

○水彩画は油絵と違って色がアッサリと仕上がっている。[意味A]

○白地に線がき、そろいの浴衣の柄ゆきもアッサリして涼しげだ。[意味B]

○母の反対を覚悟していたが、諦めたらしくアッサリと結婚を許してくれた。[意味C]

○互角の勝負を期待していたのに、いきなりアッパーカットでダウンして一回戦でアッサリ幕切れ。[意味D]

「シットリ」… [意味A] 湿度、水分が適当に行き渡っているようす。

[意味B] 落ち着いた風情があって安らぐ感じであるようす。

○昨夜の雨が上がり、シットリ濡れた木々の緑が鮮やかだ。[意味A]

○日本庭園に囲まれた数寄屋造りの家屋。シットリと落ち着いた風情だ。

以上、「□ッ□□」の形である、「アッサリ」、「シットリ」の二つの〈例〉を挙

げてみたが、語中に入っている「促音」が「強調」の意味を表すより、「促音」が入ることによって、「何かが一気に行なわれること、または軽さを感じるイメージの連想」などが考えられる。これは、南部(1992)が指摘した語末に付く「促音」の特徴と似ている。つまり、語末に付く「促音」の特徴は、語中に起る「促音」にも見られるということである。ただ、「□ッ□□」の形をしているものの中、例えば「アッサリ」は「アサ(浅)」、「シットリ」は「シト(シトシト濡れる、シトシト雨が降る)」、「ウッカリ」は「ウカ(ウカウカしていると負けてしまうぞ)」、「ハッサリ」は「バサバサ切る、バサッと切る)」などのように、何かの語基「□□」が「□ッ□□」というやり方で派生した形態ではないかという疑問はあるが、より多くの例を検討する必要があると思われる。

### 2.2.2 撥音 [ン] について

#### □ 泉 邦寿 (1976)

撥音は、外界の音の場合は、響きのよさ、余韻、強さを表す効果があって、また、動きの様子の場合は、リズムカルなこと、軽やかさなどを強調する効果があると述べている。例として、「カラ→カラン」「コロ→コロン」「カチ→カチン」「ケロリ→ケロリン」「ドキドキ→ドキドキン」「ガチャガチャ→ガチャンガチャン」などを取り上げている。

#### □ 南部忠明 (1992)

促音が動作の開始を中心に、リ音(流音と定義している)は動作が静止するまでを描写するのに比べて、撥音は、「動作に、より弾みがつき次なる動作へと移る過程までを描写する」と言っている。また、無声、有声による巨大性ほどの影響力はないが、動作、運動に弾性、余韻性が出ることから、音及び物体も大きくなる傾向があると述べている。氏の無声と有声の対立というのは、根本的に違いはあるが、清音と濁音の対立のことである。これについては後程述べることにする。

#### □ 田守育啓 (1993)

撥音も促音と同じように、擬音語・擬態語の語末に現われるのと、語中に現われるものの二種類がある。しかし、語中に起る撥音は「ボンヤリ」「フンワリ」などに見られるように「強調」を表すが、これらは「フンワリ(フワリ)」以外、



「ボヤリ」といった撥音を含まない対応形が存在しないので、この種の撥音は「強調の挿入辞」と見なさない方がいいと言っている。また、語末に起る撥音は「コン」「パン」「ボン」や「ガタン」「ドカン」「ポトン」などの擬音語・擬態語に見られるが、語末に撥音を持つこの種はほとんどが擬音語で、撥音は「共鳴」を表す。さらに、撥音は「銀行」「困難」などの漢語や「跳んで」「飲んで」などの和語でも見られるので、撥音自体は擬音語・擬態語に特有の特徴であると言えないが、形態素の一部である、漢語や撥音便に見られる撥音は、擬音語・擬態語の語末に起る撥音が表す「共鳴」という意味を持たないし、「川」「長い」のように、一般語に付加されることはないので、擬音語・擬態語の語末に起る撥音は、日本語の擬音語・擬態語に特有の特徴であると言っている。

以上、三つの研究を検討した結果、「撥音」に関して述べてある特徴はそれほど違いは見られない。「撥音」が付くことによって、響きが生じ、また、音が大きくなることがわかる。例えば、促音の付く「カチッ」と「カチン」を比べてみると、

〈カチン〉…金属などの堅いものが、一度強く打ち当たって出す小さい音

○クルミを石にのせ、ナイフの柄でカチンと容器に割ってくれる。

〈カチッ〉…金属などの堅いものが、一度短く強く打ち当たる小さい音

○タバコをくわえれば、カチッとライターをつけるサービスぶり

『擬音語・擬態語使い方辞典』

以上、〈例〉でわかるように、語末に付く「促音」が一瞬で短い音を表すのに対して、「撥音」の付く「カチン」の方が、幾分響く感じで、音が大きくなるようである。また、語中に起る「撥音」は田守（1993）で、「撥音」の付かない「フワリ」より「撥音」の付いた「フンワリ」の方が「強調」になると言っている。しかし、「撥音」が付くことによって、「強調」以外に「幾分落ち着いた感じ」を表す。

田守（1993）で、「フンワリ（フワリ）」以外、「ボンヤリ」は「ボヤリ」といった「撥音」を含まない対応形が存在しないので、これらの「撥音」を日本語の擬音語・擬態語の独特の特徴として認めないようである。ところが、「撥音」が入ることによって「強調」以外に、「幾分落ち着いた感じ」が現われるので、語中に起る「撥音」も日本語の擬音語・擬態語の独特の特徴になると考えられる。

また、「□ン□ン」(※□印はある音を表す仮名の代わりに使う)の形は「□□ン」の形よりわずかであるが、強勢の規則性が見られる。また、反復であるから、複数回、連続的傾向もあると思われる。

・「□ン□ン」の形

〈例〉「グングン」…力の加わり方が強く運動の勢いがめざましいようす。

○力泳につぐ力泳。彼はグングンと水をあけて先頭に行く。

「コンコン」…木のような材質のものを軽く連続して打つ音・ようす。

○コンコンとドアをノックする音がした。

・「□□ン」の形

「ガクン」…重量のある物体が急激に動いて衝撃が起る音・ようす。

○かなりの段さで、ベビーカーがガクンと落ちて赤ん坊が前倒しになった。

『擬音語・擬態語使い方辞典』

### 2.2.3 リ音について

#### □ 泉 邦寿 (1976)

リ音はある程度の柔らかさ、滑らかさ、少々ゆっくりした感じを表すことが多い

リ音は促音、撥音の直後に現れない。

泉 (1976) は「リ音は促音、撥音の直後には現れない」と指摘しているように、「リ音」は、促音、撥音の直後には現われなくて、語基またはラ行の直後しか付くことができない。例えば、「バツタリ」において、促音は語基「バタ」の中に割り込む形になっている。しかし、「リ音」は、語基の中に割り込んで「バリタ」という形を作ることにはできない。撥音も促音と同様に、「ボンヤリ」においては語基「ボヤ」の中に割り込んでいるが、「ボリヤ」という形は起らない。これらの点は、「リ音」と「促音」、「撥音」は異なる振る舞いをするということであろう。また、「リ音」のさらに後に、「促音」や「撥音」を加えることはできる。例えば、「コロリッ」「コロリン」という語形などがある。天沼 (1974) に「コロリッ」のように「□□リッ」の形は「□□ッ」形と、ほとんど同じ場面で用いられることが多いものであって、多少強調した感じを表すだけで、はっきりと意味を区別することは困難であるものが多いと指摘している。

## □ 南部忠明 (1992)

促音に比べ動作性がより大きくなり、円滑性が出るために動作が滑らかになる。また、「動作が静止するまでを描写する」ともいえ、そのために完了性や間歇性が強くなり状態性が出てくる。特に擬態語の場合においては、より状態性が出てくる。擬音語に関しても動作の終了までを描写するために、状態性が出てくる。

ここで指摘されるように「促音」は動作の開始を中心に一回で、瞬間的、動作の短さを表すのに対して、「リ音」は、事態や動作がある一定の時間持続し、その後に完結するということを表していると考えられる。また、「撥音」に対しては動作の持続時間がある程度長いということの共通点はあるが、「リ音」は一つの事態や動作の終了、完了を表す。しかし、「撥音」は終了の時点から次の動作への移る過程までを表していることが窺える。

## □ 田守育啓 (1993)

氏は「リ音」がついて表す役割として二つの点を挙げている。まず、促音を語尾に持つ語（擬音語・擬態語）と比べると、リ音を語尾に持つ語は「ゆったりした感じ」を表す。例えば、「ゴロッ」と「ゴロリ」を比べてみると、両者とも基本的には「比較的重量のあるものが一転がりするようす」を表すが、「ゴロリ」の方が、「関わっている動作がゆったりしていると感じられる」と言っている。また、「ゴロゴロ」と「ゴロリゴロリ」の比較から、「ゴロゴロ」が「転がるという動作（一転がり）の繰り返し」を表す。即ち、この場合のリ音は「完了」を表すと言っている。ここで、「ゴロリゴロリ」は運動がややおそく、大きく、ひと転がりごとに、わずかに休止のある感じの連続を表しているといえるだろう。

以上、「リ音」は、滑らかさ、ゆったりした感じを表し、また、事態や動作がある一定の時間持続し、その後に完結するという、即ち完了性を表すことがわかった。先に述べたように「□□リッ」「□□リン」の形は「ッ」と「ン」の付くことによって「強調」されるだけ意味にはほとんど区別がないようである。

## 2.2.4 反復

## □ 泉 邦寿 (1976)

日本語の擬音語・擬態語の中で、「カラカラ」「コロコロ」「クヨクヨ」「ドスン

ドスン」などのように、同音の反復（畳語）の形が圧倒的に多いが、これは日本語だけではなく他の言語にも見られる傾向である。また、反復の形が持つ特徴としては「物音や動きの繰り返し」を表す特徴を挙げている。ところが、擬音語・擬態語に見られるような反復の形は、日本語では、ごく一般的な語にもよくあるので、形態上の反復は擬音語・擬態語だけでなく、日本語の語彙の一般的な傾向としても考えられる特徴と指摘している。

#### □ 田守育啓（1993）

擬音語・擬態語に見られる反復は、「音や動作の繰り返しないしは連続を表す」という特徴を持つ。ところが、反復は「延々」「人々」「青々」など、漢語や和語にも見られ、「複数」や「強調」を表すので、反復自体を日本語の擬音語・擬態語の特徴であるとはいえないが、「音や動作の繰り返しや連続を表す」という反復は、擬音語・擬態語の独特の特徴であると指摘している。

以上、擬音語・擬態語において「反復」の特徴について見てきた。「反復」は、音や動作の繰り返しや連続を表す特徴を持っている。また、意味の強調やリズム的效果もある。大坪（1989）に、「反復は単純反復と修正反復の二つがある。単純反復は単純であろうと複雑であろうと、同じ状態がそのまま反復継続することを、修正反復は、単純であろうと複雑であろうと、その状態に変化が生ずることやその状態を強調したり、和らげるはたらきをする」と指摘している。また、反復形が多い理由を、大坪は「日本語の擬声語（氏は擬音語・擬態語を一括して「擬声語」と呼んでいる）で、四音節がもっとも多いのは、 $2 \times 2$ の構造を持つものが多いことに、最大の原因がある」と述べられている。

### 2.2.5 清濁音の対立

#### □ 泉 邦寿（1976）

氏は促音・撥音・リ音・反復の以外、日本語の擬音語・擬態語に顕著に見られる現象として清濁音の対立を挙げている。氏は「客観的には同じような様子を指しながらそれに対する人間の側の評価や情緒的な感じの違いを対立させているのが清濁音の対立である」といい、清濁の対立とその意味的效果について次のように説明している。

清音が軽やかであり、濁音は重い。清音との対立で用いられる濁音は、外界の

音なら、重い音、鈍い音、大きな音などを表し、動作・状態なら、強いこと、大きいこと、重いこと、乱暴なことなどを表す傾向があるようだ。

といい、清濁の音の響きから与えられる音の印象について述べているようである。また、濁音は聴覚的にもよい印象を与えない傾向があるので、不快な音を表したり、動作・有様にマイナスの意味を生じさせることもあって、特に擬態語に多く見られると指摘している。

#### □ 大坪併治 (1989)

清音と濁音とを比較すると、清音は明るく、澄んで、緻密で、軽い感じを濁音は、反対に暗く、濁って、粗雑で、重い感じを表す。「カタカタ」と「ガタガタ」、「ころころ」と「ゴロゴロ」、「サラサラ」と「ザラザラ」、「ハラハラ」と「バラバラ」などのように

以上、促音・撥音・リ音・反復・清濁音の対立が日本語の擬音語・擬態語において形態的なウェリエーションばかりでなく、意味的な差異にも深く関わっていることを従来の研究と、辞典の例文などを検討した。次にこれらをもとにして、個々の語（擬音語・擬態語）の意味分析を行なうことにする。

### 3 擬音語・擬態語の意味分析

ここでは、「人間の行為に関する擬音語・擬態語」に注目して、これらの個々の語に対する意味分析を行なう。「人間の行為に関する」という一つの枠の中で、個々の語（擬音語・擬態語）は相互に強くあるいは弱く張り合いながら一定の意味空間を形成しているといえる。その枠の中で個々の語（擬音語・擬態語）の間の違いを見いだすことによって、個々の語（擬音語・擬態語）の意味特徴を掴むことができると思う。

#### 3.1 研究対象と方法

##### 3.1.1 対象

本研究の対象は現代日本語の共通語としての擬音語・擬態語に限定する。その理由は意味と音との間にある程度自然なつながりを前提として擬音語・擬態語は成り立つからである。また、時代差、個人差、方言差によってかなり違いが現わ

れるので一つの規範を設ける必要がある。ゆえに、共通語としての擬音語・擬態語を対象とする。資料は辞典を中心にする。

#### 〈資料〉

- 『擬音語・擬態語』 天沼 寧 東京堂出版 (1974)
- 『擬音語・擬態語辞典』 浅野鶴子 角川書店 (1978)
- 『擬声語・擬態語慣用句辞典』 白石大二 東京堂出版 (1982)
- 『擬音語・擬態語使い方辞典』 阿刀田稔子・星野和子 創拓社 (1993)

以上、言語資料を用い、さらに日本語を母語とする話者の助けを求めて資料を集めることにする。

### 3.1.2 方法

#### 《本研究の分類項目》

擬音語・擬態語は幅広く分布しているが、本研究では、日常生活の中で頻繁に現われうる「人間の行為に関する擬音語・擬態語」について取り上げる。小項目として六つの動詞を取り上げ、動作自体に必ず音を伴うもの「笑う」「話す」「泣く」を第一類、動作自体に必ずしも音を伴わないもの「歩く」「食べる」「見る」を第二類とする。(但し、六つに限定した理由は、日常生活の中でよく接すること、また、ここで得られる結果と他の語(動詞「人間の行為に関する」)に出る結果とそれほど違いが見られないと思ったからである。)

◇第一類	<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; border: 1px solid black; margin-bottom: 5px;"></div> A…笑う         </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; border: 1px solid black; margin-bottom: 5px;"></div> B…話す         </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; border: 1px solid black; margin-bottom: 5px;"></div> C…泣く         </div>	◇第二類	<div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; border: 1px solid black; margin-bottom: 5px;"></div> D…歩く         </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; border: 1px solid black; margin-bottom: 5px;"></div> E…食べる         </div> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle;"> <div style="display: inline-block; width: 10px; height: 10px; border: 1px solid black; margin-bottom: 5px;"></div> F…見る         </div>
------	---	------	--

まず、第一類と第二類に関わりのある擬音語・擬態語を集める。集めた語(擬音語・擬態語)をもって、これらの語(擬音語・擬態語)の弁別的特徴=示差的特徴を設定する。示差的特徴(distinctive feature)というのは、ある語の使われ方を他の語の使われ方と区別するのに必要な特徴を言う。<sup>(3)</sup>

例えば、boy と girl の対比においては〈人間〉+〈少年〉といった共通の特徴の他に boy には〈男性〉, girl には〈女性〉という特徴を設定しておく必要がある。これらの〈人間〉〈少年〉〈男性〉〈女性〉といった個々の特徴は boy と girl

という二つの語を区別する示差的な特徴である。ここで、語の意味は示差的な特徴によって構成されているといえるだろう。

本研究では、個々の語（擬音語・擬態語）の違いを見いだすのに示差的特徴を設定することにする。ただ、示差的特徴を設ける際に同一の項目を本研究で取り上げる第一類と第二類に当てはめるには難点があると思われる。第一類は、動作自体に必ず音を伴うもので、第二類は、動作自体に必ずしも音を伴わないものであり、同一の項目を立てにくいものである。つまり、「人間の行為に関するもの」という共通点はあるが、ことばが成立する際、第一類は「音（声）」が、第二類は「動作」がかかわるという決定的な違いが存在しているのである。

#### ◇ 第一類の示差的特徴の項目

一々の語（擬音語・擬態語）の意味空間は、多くの意味的特徴の閉集合と考えることができる。従って、多くの意味特徴を具体のレベルから抽象のレベルにおいて把握することによって、語（擬音語・擬態語）の意味空間を典型的に描くことが可能になる。しかも、一々の語（擬音語・擬態語）は、それ独自の意味空間を形成しているが、「人間の行為に関する（第一類、第二類）擬音語・擬態語」のように、一定の意味分野においては共通の意味特徴が一々の語（擬音語・擬態語）の間に見いだされることになる。

第一類においては、「主体：人間」と「行為：笑う、話す、泣く」という点ですべての語（擬音語・擬態語）は繋がっていると思う。また、人間の行為にかかわるがゆえに、一々の擬音語・擬態語は「どのような品位に属するものであるか」言い換えれば、「価値判断（評価）」にもかかわりのあるものである。

「主体：人間」というのは「主体」としての「人」の属性を指す。即ち、「子供」か「大人」か、「女」か「男」か、「大勢の人」か「一人」かによるものである。

また、第一類の動詞は、「動作自体に必ず音を伴うもの」であるから、「声の高低」「声の大小」の性質が見られる。

「価値判断（評価）」というのは、「誉められるべきかどうか」、「特別の価値判断に関わりのあるものかどうか」、「好意的か悪意的か」によるものである。（但し、これは主観的判断によるもので、個人差によってかなりの違いがあると思われる。本研究で取り上げる語に対しては辞典に載っている例文と日本語を母語とする話者の助けを求めて筆者なりの分析を行なうことにする）

次に、第一類の語（擬音語・擬態語）の意味分析をすることにする。

## □ A「笑う」

「笑う」に関わりのある擬音語・擬態語を集めた結果、32個であった。（但し、辞典に載っていないものが、他にもあると思う）

まず、示差的特徴によって分析を行なうことにする。

### 《示差的特徴》

- ①声の高低による（高＋，低－）    ②声の大小による（大＋，小－）
- ③主体による（男＋，女－）        ④価値判断（評価）（好意＋，悪意－）

（※編集の便宜上「Aの表」の説明を先に載せることにする）

以上、示差的特徴を設定して「表」のとおりの結果が出た。「表」に得られる結果をもって具体的な分析を行なう。これに関して、2章で結果を考察した結果をあててみることにする。

まず、ククッ、クスクス、クックッについて考察してみる。これらは、示差的特徴によって分析するとまったく同じ結果になる。ククッとクックッを比べてみると、それほど違いは見られないが、ククッは語末に促音「ッ」があるので、「一気」に行なわれることが窺えるし、クックッは促音の性質も窺えるが、反復であるから、「連続する」というイメージが窺える。ここで、促音と反復が微妙なニュアンスを作り出すものであると思われる。また、クスクス、クックッ、フッフッを比べてみると、この三つは入れ替えられると思うが、クスクスよりクックッ、フッフッの方が、促音「ッ」があるので、押さえて一気に出るようである。

次に、ケタケタ、ゲタゲタとケラケラ、ゲラゲラをみると、示差的特徴では、声の高低と声の大小の項目が異なっている。このように違いが生ずるのは、清音と濁音によるとと思われる。清音は鋭い感じ、軽い感じ、美しい感じを表すのに対し、濁音は、鈍い感じ、重い感じ、汚い感じを表すという特徴のためであると思う。

ここで、「笑う」という一つの動詞に関わっている個々の語（擬音語・擬態語）が非常に細かく区別されていることがいえるが、促音、反復、清濁音の対立がそういう細かいニュアンスの違いを作り出すものであるといえるだろう。



## A (人間)(笑う)を共通成分とする語

	①	②	③	④				①	②	③	④			
あはは	+	+	±	+			ころころ	+	-	-	+			
いひひ	+	+	±	-			にこっ	-	-	±	+			
うふふ	-	-	±	-			にこにこ	-	-	±	+			
えへへ	-	-	±	-			にこり	-	-	±	+			
おほほ	+	-	-	+			にたにた	-	-	±	-			
かっかっかっ	+	+	+	-			にたっ	-	-	±	-			
からから	+	+	±	-			にたり	-	-	±	-			
きゃっきゃっ	+	+	-	-			にっこり	-	-	±	+			
くくっ	-	-	-	-			にやっ	-	-	±	-			
くすくす	-	-	-	-			にやにや	-	-	±	-			
くっくっ	-	-	±	-			にやり	-	-	±	-			
けたけた	+	+	±	-			にんまり	-	-	±	-			
げたげた	-	-	±	-			はっはっ	+	-	±	+			
けらけら	+	+	±	-			ふっふっ	-	-	±	-			
げらげら	-	+	±	-			へっへっ	-	-	±	-			
ぶっ	-	-	±	-			へらへら	-	-	±	-			

## □ B「話す」

「話す」に関わりのある擬音語・擬態語を集めた結果、31個であった。(但し、辞典に載っていないものが、他にあると思う)

まず、示差的特徴によって分析を行なうことにする。

## 《示差的特徴》

- ①声の高低による(高+, 低-)      ②声の大小による(大+, 小-)
- ③主体による(男+, 女-, 大勢※) ④価値判断(評価)(好意+, 悪意-)
- ⑤口数(密度・頻度)の多少による(多+, 少-)

## B (人間) (話す) を共通成分とする語

	①	②	③	④	⑤			①	②	③	④	⑤	
がみがみ	+	+	±	-	+		がやがや	+	+	±	-	+	大勢
きっぱり	-	-	±	+	-		のりくらし	-	-	±	-	-	
ぐずぐず	-	-	±	-	-	子供	ぱっぱ	+	+	±	+	-	
くだくだ	-	-	±	-	+		ひそひそ	-	-	±	-	-	
くどくど	-	-	±	-	+		ぶうぶう	-	-	±	-	+	
こそこそ	-	-	±	-	+		ぶつぶつ	-	-	±	-	+	
ごたごた	-	-	±	-	+		べちゃべちゃ	+	+	±	-	+	
ごてごて	-	+	±	-	+		へどもど	-	-	±	-	-	
しどろもどろ	-	-	±	-	+		べらべら	+	+	±	-	+	
ずけずけ	+	+	±	-	+		べらべら	+	+	±	±	+	
ずはずば	+	+	±	+	-		ぼそぼそ	-	-	±	-	-	
ずば	+	+	±	+	-		ぼんぼん	+	+	±	+	+	
ずばり	+	+	±	+	-		ぼつりぼつり	-	-	±	-	-	
たらたら	-	-	±	-	+		むつり	-	-	±	-	-	
つけつけ	+	+	±	-	+		むにゃむにゃ	-	-	±	-	-	
つべこべ	-	-	±	-	+								

以上、示差的特徴を設定して「表」のとおり結果が出た。「表」に得られる結果をもって若干説明することにする。

まず、④「価値判断(評価)による」の項目において、「+」(好意)になっているものが、31個の中、7個しか見られない。即ち、「話す」に関する擬音語・擬態語は全体から見てマイナスの表現が多いと言えるだろう。また、③「主体による」の項目は、すべて「±」となった。この項目は、「話す」に現われる擬音語・擬態語において特別の意味的特徴を有さないものであると思われる。

同一の語基に促音・撥音・リ音・反復・のバラエティが見られるのは少ないが、ズバズバ・ズバツ・ズバリがあり、清濁音の対立が見られるのは、ベラベラ・ペラペラがある。これらは示差的特徴の結果は同じだが、確かに違いはあると思う。この表の項目では、弁別不可能な細かいニュアンスの差を促音・撥音・リ音・反

復・清濁音の対立が作り出しているといえるだろう。

# □ C「泣く」

「泣く」に関わりのある擬音語・擬態語を集めた結果、16個であった。(但し、辞典に載っていないものが、他にもあると思う)

まず、示差的特徴によって分析を行なう。

## 《示差的特徴》

- ①声の高低による(高+, 低-)    ②声の大小による(大+, 小-)
- ③主体による(男+, 女-)        ④価値判断(評価)(好意+, 悪意-)

(※ 編集の便宜上「Cの表」の説明を先に載せることにする)

以上、「表」の結果を見て若干説明を付け加える。

まず、撥音の有無によって意味の差が生じていることがわかる。オイオイより撥音が入っているオンオンの方が弾みがつき、響いている感じ、また、大きくなる感じがする。他に撥音が入っているものも同様であるといえるだろう。また、ビイビイとパイパイ、ボロボロとポロポロのように、濁音と半濁音の対立になっている。半濁音に関しては本研究で考察していないが、清音とほぼ同一の特徴であると思われる。

## C (人間)(泣く)を共通成分とする語

	①	②	③	④			①	②	③	④	
あーん	+	+	±	-	子供	ぼろっ	-	-	±	±	
えんえん	+	+	±	-	子供	ぼろぼろ	-	-	±	±	
おいおい	+	+	±	-		ほろり	-	-	±	±	
おんおん	+	+	±	+		ぼろぼろ	-	-	±	±	
しくしく	-	-	±	+		めそめそ	-	-	±	±	
はらはら	-	-	-	+		わあっ	+	+	±	-	
びいびい	+	+	±	-	子供	わあん	+	+	±	-	
ぴいぴい	+	+	±	-	子供	わんわん	+	+	±	-	

## ◇ 第二類の示差的特徴の項目

第二類の語（歩く，食べる，見る）は「動作自体に必ずしも音を伴わないもの」であるので，第一類の示差的特徴の項目を当てはめるには難点があると思われる。但し「主体：人間」と「価値判断（評価）」の項目は第一類にそのまま取り入れる。「行為：歩く，食べる，見る）に関する項目だけ設定する。第一類の「声」を「動作」にした。また，各々の語（歩く，食べる，見る）の特性によって異なる項目を一つずつ設定してみた。それについては各々のところで述べることにする。

## □ D「歩く」

「歩く」に関わりのある擬音語・擬態語を集めた結果，31個であった。（但し，辞典に載っていないものが，他にもあると思う）

まず，示差的特徴によって分析を行なう。

## 《示差的特徴》

- ①動作の大小による（大＋，小－）    ②動作の速度による（早＋，遅－）  
 ③主体による（男＋，女－）    ④価値判断（評価）（好意＋，悪意－）  
 ⑤規則正しい，不規則による（規則的＋，不規則－）

## D（人間）（歩く）を共通成分とする語

	①	②	③	④	⑤		①	②	③	④	⑤	
うろうろ	－	－	±	－	－	どたどた	＋	＋	±	－	－	
うろちょろ	－	＋	±	－	－	どたばた	＋	＋	±	－	－	
さっさ	－	＋	±	＋	＋	とっと	＋	＋	±	＋	－	
しゃなりしゃなり	－	－	－	＋	－	とほとぼ	－	－	±	－	－	
ずかずか	＋	＋	±	－	＋	どやどや	＋	＋	±	－	－	
すたこら	＋	＋	±	－	－	のこのこ	－	－	±	－	－	
すたすた	－	＋	±	＋	＋	のそのそ	－	－	±	－	－	
たったっ	＋	＋	±	－	＋	のっしのっし	＋	－	±	－	＋	
だだだっ	＋	＋	±	－	＋	のろのろ	－	－	±	－	－	
つかつか	＋	＋	±	＋	＋	ひょろひょろ	－	－	±	－	－	
てくてく	＋		±	－	＋	ぶらぶら	－	－	±	－	－	
どかどか	＋	＋	±	－	－	大勢 よたよた	＋	－	±	－	－	
とことこ	－	±	±	＋	＋	よちよち	－	－	±	＋	－	子供
どきどき	＋	＋	±	－	－	大勢 よぼよぼ	－	－	±	－	－	
どしどし	＋	－	±	－	＋	大勢 よろよろ	－	－	±	－	－	
えっちらおっちら	＋	－	±	＋	－							

「表」に得られる結果をもって少し述べることにする。

まず、集めた擬音語・擬態語の形態的特徴をみると、大部分が反復形になっており同一の語基に促音、撥音、リ音によるバラエティは見られない。これは「歩く」という動詞の意味特徴によるものであろう。「歩く」というのは、「人や動物がふつうの速度・歩幅で足を交互に動かし、平坦な場所を一步一步踏みしめて移動する」(『基礎日本語辞典』)ことで、リ音の持つ完了性などは関わりにくいということがいえる。また、示差的特徴の③「主体による(男・女・子供・大勢)」という項目においてはそれほど違いが見られないが、これは「歩く」に現われる擬音語・擬態語が「人の属性」において特別の意味的特徴を有さないものであることを示している。ただ、他の枠、「人間の行為に関する擬音語・擬態語」以外のものと区別する際には示差的特徴として取り上げられると思う。

#### □ E「食べる」

「食べる」に関わりのある擬音語・擬態語を集めた結果、14個であった。(但し辞典に載っていないものが、他にもあると思う)

まず、示差的特徴によって意味分析を行なう。

#### 《示差的特徴》

- ①動作の大小による(大+, 小-)    ②動作の速度による(早+, 遅-)  
 ③主体による(男+, 女-)    ④価値判断(評価)(好意+, 悪意-)  
 ⑤動作の密度(頻度)による(多+, 小-)

#### E (人間)(食べる)を共通成分とする語

	①	②	③	④	⑤		①	②	③	④	⑤	
ががつ	+	+	±	-	+	ごりっ	+	+	±	-	-	
がぶり	+	+	±	-	-	ばくばく	+	+	±	±	+	
がりがり	+	+	±	-	+	ばくり	+	+	±	+	-	
ごくごく	+	+	±	+	+	ばりっ	+	+	±	+	-	
ごくり	+	+	±	+	-	むしゃむしゃ	+	+	±	-	+	
ごくん	+	-	±	+	-	もぐもぐ	-	+	±	+	+	
こりこり	-	+	±	+	+	もりもり	+	+	±	+	+	



「表」に得られる結果をもって若干付け加える。まず、示差的特徴の中、「主体による」の項目による分析において11個の結果が同一である。同一の結果になるというのは意味の区別に大きな影響を及ぼしていないことになるが、「見る」という動詞は〈人間（主体）〉＋〈あるもの（対象）〉のように二つの要素項がその意味を構成する条件となっている。とすれば、「主体（人間：男・女）」による項目が「見る」に現われる擬音語・擬態語の個々の特徴を区別する決め手ではないが、他の枠（例えば、人間の行為と無関係のもの）の二つの語（擬音語・擬態語）とを区別する示差的特徴の項目として取り上げておくべきであろう。

#### 4 おわりに

3章の分析で、取り上げた語（擬音語・擬態語）それぞれの意味特徴がかなり明確になったとは思いますが、本章で設定した示差的特徴がそのすべてというわけでは決していないと思われる。今後は、これらの他に、個々の語（擬音語・擬態語）の意味特徴をより一層明確に把握するためにどのような示差的特徴を設定すべきかを考察することに努めなければならないであろう。また、「人間の行為に関する」という項目以外に他の枠（例えば、人の身体的特徴、物の様態・性質・自然現象…など）に現われる擬音語・擬態語に対しても、本研究で行なった方法を使って意味特徴を掴んでいくことが課題になるだろう。

#### 註

- (1) 擬音語・擬態語の意味を考察する場合は、意味論の領域で主として取り扱われる「概念的意味」とは違って、「感情的意味」の比重がより大きくなるがゆえ極めて主観がはいりやすくなる。
- (2) オノマトペというのはギリシャ語で「語の創造」を意味する。ヨーロッパの言語学者は擬音語のように、直接的音の模倣による語をオノマトペと呼んでいる。

玉村文郎は次のように述べている。

「擬音語か擬態語かという分け方には、それなりの根拠がありはするが、実際上は両者を一括して音象徴語と称した方がよいと思う」

『日本語の音象徴語の特徴とその教育』『日本語教育』68号

(3) 池上嘉彦編『意味論・文体論』「英語学コース4」(1985)を参考。

#### 参考文献

- 池上嘉彦(1985) 『意味論・文体論』「英語学コース4」大修館書店  
国広哲弥(1982) 『意味論の方法』 大修館書店  
南不二男(1974) 『現代日本語の構造』大修館書店  
『擬音語・擬態語辞典』浅野鶴子(1978)角川書店  
『擬声語・擬態語慣用句辞典』白石大二(1982)東京堂出版  
『擬音語・擬態語使い方辞典』阿刀田稔子・星野和子(1993)創拓社

(ミン ジイヨン 国語学)